

老人とサッパ

黑白 3 巻 36分 ¥50,000円

製作 財団法人結核予防会
企画 株式会社桜映画社
監督 村山英治
脚本 吉田雅夫
撮影 堀内正実
照明 江連高元
音楽 明沼吉
解説 永井智雄
監製 仁平 大久保喜一郎
ユミ 山根元子
イノ 長岡ひろ子
保母 梅村綾子
保健婦 加賀幸子
石川 田中茂
老人 小本初太郎
協力 宮古市・劇団表の会

解説

今日では、結核で死ぬ人は少なくなっています。「直せる」ということで結核は過去の病として忘れられようとしているのです。けれども患者数は少しも減少していないという事実とこれによつて受ける個人や社会全体の莫大な損害にいたつては、一般にまだ充分理解されていないといつてもいいでしょう。色々の組織を通してその早期発見と治療に努力がされておりましたが、組織をもたない女や老人の中には、一度も健康診断を受けていないものもあります。ことに老人の肺結核の場合、たいていの老人は、自分ではぜんそくだとかん固に主張することが多いのです。そして自覚症状に至つては咳痰があつても老人のためであると自らあきらめていて、殆んどが医師を訪れもしないのです。結核に感染した子どもたちをさぐつていくと、そうした老人が感染源になつていて、場合が非常に多いといわれています。この映画もそういった老人と子供の問題がテーマになつています。

あらすじ

三陸の海は厳しい。暗礁が多く海流の変化がとくに激しい。シケで荒れた海はこの地方の人々の生活を著しく貧困と無知の中に閉じている。海を目前にしなが、海が遠くなつていく現実。人々は小さな船でも魚のいる遠くまで出かけてはならない。岸近くでできる磯漁は留守をあずかる老人や女、子どもあるいは家族ぐるみの零細漁民の仕事である。磯漁はサッパと呼ばれる磯舟にのつて行われる。そしてサッパにのる老人の殆んどはその昔北洋や南洋で活躍したけれど結局資本家にも船主にもなれなかつた人々なのである。仁平もそういった老人の一人であつた。

夕暮れ時、町に灯のともる頃に仁平のサッパは浜に帰ってくる。あわただしき夕暮れの漁港、中でも一番活気づくのは魚市場である。大小さまざまな魚がどんだん船からおろされて運ばれてくる。サッパをしまつた仁平も竹カゴの獲物をこの市場にもつてくるのが日課であつた。

娘のイクノはこの魚市場で働いている。イクノの夫は遠洋漁業に出かけていて長いこと帰つてこない。留守宅の夜はなんとなくわびしい。けれども市場で夫の帰りが近いとき、きたイクノの心ははずみがちである。酒をのみながら仁平は孫娘のユミ子とたわむれているが、つい長いこと咳こんでしまう。

ユミ子は保育園に通つている。ある日園児のツベルクリン検査が行われた。そしてユミ子は結核に感染している事を発見される。その事を告げに保母と保健婦とが仁平の家を訪れる。けれどイクノはいない。保健婦は魚市場にイクノを尋ねユミ子の感染の事を話す。そして診療所に行く様説得する。

思い迷いやつと決心してユミ子をつれていった町の診療所で、医師の石川から仁平も診察する必要があるといわれる。

仁平は、そんな事なぞ知らずにシケの続く海のおさまるのを待つている。家では咳が止まることが多い。とうとうイクノはユミ子の発病と仁平も診察が必要といわれたことを話す。けれども結核はマキ(血統)だと信じている仁平はそれをガンコに受け入れようとはしない。「おらうちば、ハイビヨウ・マキじゃねえ」この自信のない確信こそ実は家族内感染をもたらすものなのである。

海に出られないまま眠っているユミ子を見とれているうちにしわぶいて仁平はハツとす

る。もしやという不安と疑惑が仁平の心にめばえたのだ。仁平は部屋すみにころがつて

いる痰紙をひろいあつめて庭で燃す。けれどもやつてきた友達の老漁師にはこういつてみる。「年寄りには咳も痰も出るもんだ。毎日海の上で汐風を吸つてお天道様に焼かれてる人間がそんな病気になる苦がねえ」強がりはいつても不安はやつぱりのこる。

沖がやつとおさまつた。老人はサッパを出し漁をする。一疋もとれない魚を待つて波にゆられてるうちに、寝ているユミ子の顔が浮ぶ。夏の浜辺でユミ子が笑つていた、駈けていた……様々の幻想にうつらうつらしているうちに、突然激しい喘息が襲つてきて仁平は舟の中にたおれ意識を失つてしまふ。

長いこと波にゆられて漂つていたようだ。ふと気付くとサッパは、アワビの禁漁地の浄土ヶ浜の岩かげでゆれていた。結核にはアワビがいいと友達の老漁師が言つたことを思いだし、仁平は禁を犯してアワビをとり始める。のぞき鏡をのぞきながらサオで海底をさぐる。しかし目をこらしても視点がさだまらない。仁平の目は塩にやかれてただれてしまつていたのだ。

家に帰つた仁平はのぞき鏡を粉々に砕いてしまふ。目をやられた以上彼にはサッパにのることすら無意味に思われてくるのである。漁にも出ずに、仁平は魚市場をのぞきに行く。相変らずにぎやかな活気が彼をとらえ、たくましく勇敢であつた昔を思い出させた。けれどもすぐに心はどうしようもなくにがしくなるのである。

思いあぐねてある日、仁平は医師の石川を釣をしている船着き場に尋ねる。そして孫をよろしく頼むのである。それは彼が長いこと迷つた末の心の傾きであつた。石川はそんな仁平を快よくむかえ診療所にくるようにとやさしくいう。

仁平の部屋のすみからヒドラジッドを発見したイクノは、父が診療所に行つたことを知り初めて安堵する。

漁師たちは生活がどれほど貧しくとも苦しくとも絶望してはいない。結核を治療しながら仁平も体の動く間は最後まで働いて生きていくに違いない。非情なまでに美しくそして残酷な三陸の自然にきたえぬかれたそれは哀しくもみごとな陸中漁師の心意気であらう。